

民衆史の遺産：民間信仰 読みながら、アニミズムとシャーマニズムのことを調べてみた。

◎アニミズム animism：1871年E・タイラー著<原始文化><すべての物や自然現象に、靈魂や精神が宿るとい  
う思考、原始宗教の特徴を表す語>の語源は生命や魂。アニマルやアニメーションも関係する言葉。日本語では  
精霊信仰と訳される。自然界に存在するものには精霊や靈魂が宿っている。

◎精霊信仰と聞いて驚かされる。オレは勝手なもので、「苦しい時の神頼み」に満ちみちている日常生活、なれど  
既存の宗教、金ぴかの御殿、ここではこう額づけ、金を払え、こういうモノに背をそむけて生きてきた。それに  
比べれば自然崇拜、自然の中のあらゆるものに魂があり精霊が宿るとは素晴らしいじゃないか。

◎シャーマニズム：語源は諸説。シャーマン（巫者フシャ）という職能者がトランス状態に入り、靈的、超自然的  
存在と接触し儀礼をおこなう。<トランス状態：通常と異なった意識状態（変性意識状態）になったもの。入信  
状態、恍惚状態と呼ばれ、現代も、リハビリ、教育、スポーツなどに使われる。>

◎シャーマンと呼ばれる人が古代から現代まで世の中に存在して、尊敬され怖れられ嫌われというような世界を  
生きてきたのだろうと想像される。オレが絵を描いていて、とある瞬間、ふっと浮くことがある。いつもいつも  
そういう状態ではないけれど、ふっと浮き、絵ができあがる。恍惚状態の一種かも知れないが、そういう時は、  
「できた 描けた」と嬉々とした結果が待っている。度々こういうことがあれば、我が人生は幸多かれなんである  
が、そうは甘くはない。

◎日本では、古代の巫女、東北のイタコ、琉球のユタなど。世界中にその存在があるらしい。

◎シャーマン（呪術師・占い師）の仕事は：病気の治癒。呪いをかけたり解いたり。死者の霊を呼ぶ、神や精霊  
を呼ぶ。未来予言、人生相談。

◎柳田国男<先祖の話>日本人の先祖崇拜、死者礼拝、祖霊信仰について論じている。日本は神国也、こういう  
言葉を口にしていた人たちが、昔は今より多かった。<略>三百年来の宗旨制度によって、うわべは仏教一色に  
塗りつぶされてから後迄も・・・<略>たとえ肉体は朽ちて跡なくなってしまうとも、なほこの国土との縁は断  
たず<略>最後は成仏であり、出てくるのは心得違いでもあるかの如く・・・。

◎柳田が言っていることは、仏教の僧侶が、念仏供養の功德によって死者は必ず極楽に行くと言っておきなが  
ら、一方では盆の度にこの世に帰ってくる。死んでしまった人間の霊が迷ってこの世に帰ってくる、帰って  
きた亡魂のために経を読む仏教僧の矛盾。盆行事は日本古来の信仰であつたらしい、仏教の教えとは矛盾するも  
のらしい。今の日本人は（これは明治の話）、神や仏やなどと普通に言っているが、江戸時代は驚きをもって論じ  
られていた、江戸時代は仏教が一番であつた。

◎死霊の信仰というのは、死後において死者の霊と肉体とを分離した考えの上に立っている。日本の葬送の一つ  
の特色であつた。死者の霊にともなう根強い信仰とは、死者の霊を極度に恐れ、それを我が家から遠くへ追い払  
おうとする行事であつた。いなくなって欲しくない身内であっても、死ねば骸、生きかえって欲しくないという  
矛盾。

◎宗教の要素が述べられている。まず教祖が出現する。教祖によって、教義・教理などの教えが示される。教祖  
によって俗世間に広く布教される。教祖の教えを深く信ずる信者があらわれ、信者がさらに伝道者となって布教  
していく。それに反し、民間信仰は、宗教活動とはいえ、ムラやマチの地域社会に置いて、民衆の間で培われ、  
育てられた信仰である。地域社会のメンバーが順番に交代しながら、教祖であり、伝道者であり、信者である。

◎人生は予測されたごとく淡々と進むわけではない。不意の打撃、個人の意思では逃れきれない戦争という悲劇  
に遭遇し、戦場に出て生命を奪われる。災害、気候変動などによってもその打撃は大きい。

◎精霊信仰：風だとか雷だとか洪水というような、人間の生活に大きな脅威を与える。その脅威の矛先を避ける  
ために、自然の靈威を期待する、そして信仰の対象となる。そこに精霊信仰の成立する根拠がある。我が原始人  
はそれをタマ（靈魂）とみた。人間にはヒトダマがあり、樹にはコダマがある。火にはヒダマがあり、船にはフ  
ナダマがある。雨、風、雷のごとき自然的機能はすべてこのタマの作用するところと見たわけである。

安威川の河川敷、なにげなしに空を見上げた、「お 今日の空はきれいだ」と思わずつぶやいた。年に何度かそういう日がある、思わず見上げしみじみ魅入り、「お 今日の空はきれいだ」とつぶやく。そういうことでは最高に素晴らしいというほどではなく、何日ぶりにきれいな空を見たかな、というぐらいの感動であった。

考えれば空ほど日々違った顔をしているものはないのではないかなと、今発見した。発見したとは大袈裟な表現だけれど、自然の中でこれほどめぐるましく、昨日のことなどまったく関係なく、新しい模様、斬新なデザイン、豊かな表現、などというのはちょっと表現しすぎの感があるかな、「たかが空じゃねえか 青い空に白い雲 黒い雲 ただそれだけじゃねえか」「朝陽と夕陽があるねえ 黄色く 青く オレンジ色に 虹色に」

小学生の低学年の子どもたちに絵を見てあげながら、「風を描いてよ」「かぜ 風なんて見えないよ」ときょとんとする。「なにってんだ 風には色がある」「???」「虹を見たことがあるか オーロラの画像 見たことがあるだろう」「空気が動くんだ」「ちゃんと色のついた 空気が動くんだ」子どもたちの顔がいつせいに光を帯びる、「わかった 描ける」子どもたちの手がいつせいに動き出す。みんなそれぞれ違った形、なんでそんな色が思い浮かぶのか、というようにそれぞれ絵になっていく。

五十歳ころ、仏教系宗教寺院の大きな講堂に天井画を頼まれたことがある。天井一面に空を描いてくれという依頼だった。北海道にそれとよく似た空の絵があるのでそれを見に行ってくれということで、北海道旭川付近に行った。球状の天井ドームにヨーロッパの大寺院、教会によく描かれている空があった。「なんだこれならできる」とその日は大雪山麓の小屋に止まり、翌日大雪山に登った。思い出すが、そばにケーブルがあるのをしり目に歩いて上り下りした、元気盛りの頃だった。大阪に帰り空を上手く描けそうな知人を探し出し、彼に下図を依頼した。美大出身の彼は、博物館のジオラマ制作などが得意らしく、想像で岩やら川やらジャングルを上手く描ける人のようで、空の絵、天空の青空の下書きを上手く描いてきた。現場作業は二三ヶ月続いた、車の付いた背の高い足場に乘って何人かで作業を続けた。完成直前に信者の絵描き団体が表れその仕事は途中で終わった。事情は分からないがどこか圧力があつたよう、その後どうなったかも知らない。

空はいつでも見れる、どこにでもある、あまりに普通のことなので生涯空のことは意識しなかったという人もいだろう。上を見上げりゃ空がある、上を見上げりゃどこも空。明るいときは青い空、飛行機雲が走っている。闇夜のときは漆黒の空、おぼろ月が霞んで雲がかかっている。星が、陽が、雨が、光が、ただそれだけのもの、毎日まいにちそれだけのもの。どこまでが空でどこからが宇宙かな、そしてオレは考えてみた。空と宇宙には境界膜がある、はっきりとわかるそれがある。大きな器、でかい椀がある。椀が伏せてある、その椀の内側が空なんだ、椀の外側が宇宙なんだ。椀は薄いうすい膜でできているが、それは存在しない。膜という記号だけで、膜自体は存在しない存在だ。宇宙は別世界、おとぎ話ならば、別世界というけれど、こちらの世界と似たような風景、家があって、幸せな人がいて、不幸せな子どもと爺様がいて、同じように話をして、大きな声で笑い泣く。だけとおとぎの国じゃないこの宇宙は、宇宙の世界は想像を絶する世界。空間と時間はある、とてつもない大きさ、十の何百乗の数字の世界。生命体というような体は無い、形のある身体はない、思考はある。思考するのは誰なのかではなくて、思考そのものが宇宙なのかもしれない。空間であり時間であり、そいつが思考する。その思考は、幸せを求めるとか、より良い思考を考えるとか、望みをかなえたいとか、発展したいとか、長寿を願うとか、そんな馬鹿なことはいっさい想わない。漂う気配を制御する思考、点と点を、自身から自身へ、移動する線やら面やら、その無造作な動きを静止する。漂うということが、静止をゆっくり動かす。漂って存在する、固まって存在する、瞬時に存在する、点で存在する。

存在すると言っているが、それは存在じゃなく 何もないことなんですよ。何もない。

民衆史の遺産：富岡謙二著<娼婦-海外流浪記>

◎維新前から明治の末にかけて、娘子軍（じょうし）-日本の娼婦は、世界の隅々まで動き回っていた。そこに記された足跡の遅しさ、流された行方の遠さには、今さらながら驚かされる。<略>異国におけるしがいない生活の記録などを、こまめに手掛けた人は見当たらない。わたしはなんとかして彼女らのありのままの姿を、今のうちにできるだけはっきり浮かび上がらせておきたい。

◎まず、よくもこれだけの資料、材料が集まったものと驚き、まとめた先生に拍手です。これを読むうちに、この本に書かれている内容が、半世紀も前に流行っていた日本映画、やくざ映画の場面が頭にめぐる。やくざの親分、無法者の一匹狼、賄賂を欲しがめる役人、町をたむろする軍人、泣かされ責められる女、啖呵を切る女や傑女、こんな無法者の男女が、日本を出奔して近隣の世界で暴れまわる。かつての日本映画が、この本を参考に脚本を書いていたのか、かつての日本人がこれほどまでに野放図だったのか、不思議な感がある。本の中で、志那人のことを、好感をもって接していたムスメたちが多く書かれている。「外人の中では 志那人が品よく親切」と出てくる。また主要な国以外は、〇〇族だとか、土人という単語も見られる。今でこそ土人という言葉は聞かれなくなったが、半世紀前までは普通に聞いていた、使っていた記憶がある。

◎明治維新から 10 年 20 年経ったあの当時、日本のまわりのいろんなところに、たくさんの日本人がいたようにうかがわれる。密出国やら、商用やらの民間人の男女がいたようで、そんな日本人を頼ってか、拉致されてか、日本人のムスメたちが多数、渡っている。売られ買われたムスメたちが、異国の遠いところで、身体を張って生きていた。彼女らの客は日本人ではなく現地の男たちだったようだ。

◎目次の項にいくつかの地名が見えるので列記。ウラジオストック・沿海州・オムスク・満州・ハルピン・南回帰線・上海・香港・シンガポール・マレイ・北回帰線・南太平洋の島々・女護ガ島・仏領インドシナ・ヒィリピン・インド・アフリカ・ハワイ・アメリカ

◎娘子軍という言葉が出始めたのが、明治二十年代、日清・日露の戦争の間を縫い、日本のムスメ、娼婦が盛んに海外に出始めた。

◎娘子軍のムスメたちは、熊本県の天草、長崎県の島原がほとんどで、中国地方も少しいたもよう。天草・島原は南蛮文化の華開いたところ、通商、貿易の我が国発祥の地であった。料理人、洗濯夫として稼ぎに出る。まじめな男なら次第に調法がられ、国元の兄弟知人を紹介せよと勧められる、こんなことで男女が出かけていった。

◎「うちのばあちゃんは 何百円稼いできた」「隣のかあちゃんは 何千円の貯金があるそうだ」「お婆さんは 金の指輪をはめて帰った」派手な生業が、女郎であれ、洋妾であってもおかまいなしであった。女買いの女衛たちも如才なくムスメたちを口説く。ムスメたちもでくわす女衛が男の第一号。

◎海外渡航旅券の入手：不正な出入国をたくらむものにそうたやすく正式な旅券が手に入るものではない。旅券の無い渡航、密航の裏街道では事故が多い、犠牲になるのはほとんどがムスメたちだ。

◎ウラジオストックに行く旅券が無いため、まず旅券無しで行けるハルピンへ、そこから貨物として送られる。

◎帝政末期のロシア海軍軍艦に便乗。色と欲の二つ返事というが、これは伝説かもと先生。

◎北に向かう密航船、救命ボートの中や、マストに高く巻き込んだ帆の中や、半死の状態で見つけられている。

◎密航船の石炭庫に隠れての密航も多い。蒸し暑い闇の中、食料や水も少なく糞尿にまみれていたのはまだいい方で、死亡してもわからないまま時間が経ち、腐りはてた死体が多く出てきたようだ。

◎太刀雄という船乗りの手記：勝立丸には 11 人の幽霊が出るのは有名な話。三井の傭船として、シンガポールまで行き来していた。主な船員はみな西洋人をいいことに、火夫の間で女たちの密航を請け負った。巧みに機関室の中に隠してしまう。ボイラーの底とか、バラスタタンの隙間とかの場所だが、航行中に突然汽缶が破裂し熱湯がふきだした。水夫たちはこっそりと亡骸を細かくして海に投げ込んだそうだ。

◎娘子軍の大物列伝：「サンダカンのおくに」「コーランポーのおとよ」「メリケンのお花」これまたかつての日本映画に出てきそうな名前が列挙される。男も女も、この荒くれ時代には傑物がいたようだ。

ラジオを聞いていたらジャコメッティの名がでてきた、国立国際美術館がジャコメッティの彫刻、「ヤナイハラ」を収蔵したことをきっかけの展覧会があるらしい。ジャコメッティは(1901~1966)となっている。「なんだオレより 半世紀前の人だったのか」と驚いた。オレが絵の勉強を始めたころには世界的に有名な彫刻家で、油絵も描いていた。今あらためてネットで画像を見ながら、当時の感動が蘇ってきた、ひよろり伸び切った人体彫刻、モノクロ画面に削がれた人体画像、「これだこれだ すごかった」と思い出した。たった半世紀の過去なのに、時代は移り変わってほとんど忘れ去っている現状に、オレも含め、オレの現状、絵の世界の現状、世界の現状には、流れの速さ変わりようにうんざりする。「ヤナイハラ」とは、日本人の矢内原伊作先生をモデルにしたの胸像彫刻のこと、この話は初めて知った。ジャコメッティは彼をモデルにして何日も時間をかけ、何年もかかり作品を創りあげたらしい。写真で見る限り壮絶さを感じさせるすごい彫刻だ。彼の展覧会は二十歳代に日本のどこかで見た記憶がある、あまり大きな会場ではなかったのではと頭の隅をかすめる。面白いゴシップ話が載っているので紹介。モデルを始めて何年目か、矢内原はジャコメッティ夫人アネットと、情事をかわす。彼女はまだまだ若いからとそれを黙認するジャコメッティ。そのことで友情が壊れることはなかった。

オレの絵の話：2.3年前の展覧会で案内状の写真にした絵、「おかむらくん えらいあっさりして どうしたん」と言われた絵がある。「でもいいねえ このあっさりがいい」という人もいた。20号の絵、「わたしはわたし」シリーズの絵、白いキャンバスにまず最初の色を、乾いた後に次の色を、五手、六手で、「できた」という実感があり筆をおいた。今朝、寝ぼけまなこに立てかけてある絵、いま描いている絵を見て、「あの絵のようだ あっさりしているが もう筆をおいてもいいかな いいんじゃないの」としみじみ眺めいった。

最近気になること、五手、六手で軽妙に、「できた」という絵、画面全部を絵具で塗り込んでいない、キャンバスの地の色、白いキャンバス地が大きい面積で残っている。この白いキャンバス、塗り残しではないが、これはこれで完成なんだが、1年2年壁に立てかけていると、どこかしら汚れる、こすったり引っかいたりして傷がつく。色の塗ってあるところの汚れや傷は修繕が比較的しやすいが、キャンバス地そのものの汚れや傷は修復が難しい、元の白地にはなかなか戻らない。そんなことがあったので、その白地の部分に同じような絵の具、白色に少し黄色系統を混ぜたような色の絵の具をうっすらと二三度塗ってみた。この技法が気に入っている、絵が堅牢になる、絵が落ち着く、しかも白地のままの雰囲気と少しも変わらない。そんなわけで最近の十枚ぐらいの出来上がった絵に、この技法を試みている。

「赤色絵の具が 減っていないね」「そういえば 最近の絵 赤が少ない」これはちょっと気になっている、赤色は好きな色だが、使う量が少ない、「血を連想させる 血しぶき」そんなことを言われたことはないけれど、真っ赤な色の大きな面積、黒っぽい赤色絵の具のポトリポトリ、そんなことを言いながらまたまた赤の時代がまもなく復活かも知れない。

「お 大きなカメがいる」と思って近づくとちょっと様子が違う、「すっぽんじゃねえか でかいすっぽん」驚きの声をあげはしなかったが心の中で叫んだ。甲羅には拮抗模様が無く、黒く濁った緑色の藻のようなものが甲羅に張り付いている、四肢の爪はなかなか大きい。「すっぽんは 噛まれると大変」とおそろおそろ靴で身体をひっくり返してみた。クリーム色の腹、透き通りそうな腹だがここも甲羅で覆われている。頭は尖って小さいが、いざぬると首を伸ばしてひっくり返った、簡単に体を回転させた。あの首の立派さはなかなかエロチックであった。ネット検索。すっぽんはカメの仲間、甲羅はなく皮膚が硬くなったもの、ほとんど水中生活をしている。

7月も中旬に入った、天気予報は毎日、雲か傘のマークが出ている、お陽さまマークはないが、一日中雨の日は少ない、毎日河原に出ている、降られても途中でしとしとやってくるぐらいだ。まもなく梅雨明けかな。

民衆史の遺産：妖怪 江馬務著<日本妖怪変化史>

◎妖怪と聞き、ゲゲゲの鬼太郎の作者先生、おそらく幾多の文献を調べ尽くし、かの漫画の主人公たちを再現されたのだろう。この本の先生、妖怪を分類されている。漫画ほどエキサイトではないが、次々出てくる。

◎筑後国の藩士の妻、寺に参詣した途、茶店に美童がおり、しきりに挨拶をしてきた。僧の寵童かと思ったが、童しきりに秋波を送りながら近づき手を握ろうとする。妻は怒ってその場を立ち去り堂内で香を焚いていると、また手を取って誘おうとする。妻は武士の妻らしくその手を捻ったところ、童は号泣して立ち去った。僧に話すと、そのような童は知らぬという。妻は帰宅し雪隠に入ると誰かが手を伸ばし秘所を探った。妻は刀でその手を切ったところ、三指、長爪、蒼黒で皮滑らかなものであった。ほど経て以前の童が来て愛隣を乞い、手の返却を乞いに来た。妻が尋ねると、河童であると答えた。<夜窓鬼談>

◎義教將軍の臣、蟻川新左衛門が鳥辺野を長刀を担いで行った。風もひとしお身にしむ秋の夜、虫の声も秋をかこちがおなので、心の中にそぞろ哀れを感じ、歌を案じていると、火葬の火燃えた薪に向かって一人の女が座しているの、恐れもせず一人坐しておわする心はと尋ねると、<夏虫の もぬけのからの 身なればや 何か残りて 物におそれめ>という。蟻川は、「何者ぞ」問うと、「岩松無声風来吟」というかと思うと、消えた。

◎能登の小金山に又六という人、ふと下婢の色香に迷い、ついに割りない仲となったが、下婢はそのため増長して、大それたことに本妻を追放せんとし、自分の衣服を自分で切って、これを本妻の嫉妬の所業と夫に讒言した。愛に惑溺した又六はこれを轻信して、本妻を追放せしめんとしたので、本妻は無念のあまり病となりあえなき最期を遂げた。通夜で棺がめりめりと動き出し轟然たる音とともに、死んだ本妻が出てきて、たちまちにして憎しみ重なる下婢の首を抜いて口にくわえ、すっくと立ったその怖ろしさ。又六は前非を悔い言葉の限り謝罪した。本妻は謝罪を聞き首をぱったり下へ落した。<北陸奇談>

◎越中国のさる十四歳の少女が、隣家の十五歳の美少年に恋をした。女の両親はその情を知って、しいて家の外へ女を出さない。女は思い焦がれて焦がれ死ぬほどであったが、ある日、男が縁側に出ていると、女の首ばかりが胴から抜け出て、塀の上から男を見つめていた。女の兄は驚いて、首と胴との連絡の細い糸を刀で切ると、無慙や、首は地に落ち、女は空しく骸を横たえた。<大和怪異記>

◎出雲国の調介が友人所有の美人画に心から惚れ込み、どうかして真人間に姿を変え妻にしたいと願っていた。友人曰く、「毎日 昼夜 真々 と言いつつ 百日たてば 絵は生きる それに 八年の古酒を注げば 女は絵から抜け出る」調介は早速試みた。なんと美人が抜け出たので、夫婦になって一子をもうけた。ある時、調介の弟が訪れ、兄に夫人ができたことに驚き、ことの顛末を聞いた。弟曰く、「実に 妖術のいたすところ 女を害し 給わずば 災いに至らん」と名剣ひとつを渡した。女これを聞いて、調介の疑心あるを嘆き、留まることあたわずとし、古酒を吐いて消えてしまった。<太平百物語>

◎若狭国遠敷郡熊川の蜂谷孫太郎、学問が少々でき、仏教を誹り、善悪因果の理、三世流転の教を破って、地獄・天堂・娑婆・浄土の説を一笑に付していた。ある時、今津川原で日が暮れた。累々としている屍がみな立ち上がり、青鬼が来た。彼は一時仏寺に身を隠したが、また野を駆けると、いよいよ地獄に落ち閻魔の庁で裁きを受けた。角生え、嘴とがり、朱髪逆立て、目は碧の光を帯び鬼の姿となった。<拾遺お伽婢子おとぎぼうこ？>

◎京に住んでいた侍、京に妻を残して任国へ赴任したが、任も果てて、京へ戻ってきた。もと住んでいた家へ旅姿で入ると、家は荒れ果てていたが、いとしの妻が一人悄然としていた。両人は年来の積もる話を交え、やがて掻きい抱きて寝たが、夜が明け陽が差し入った。見ると、骨と皮ばかりの死人を抱いている。驚いて隣家で尋ねると、夫人はこの夏に死に、屍はそのままだと答えた。<今昔物語>

◎大納言泰道の亭に狐がよく化けて出るので、狐狩りをするようになった。その夜の夢に、木賊（とくさ）の狩衣着た男一人現れて、まげてこのたびの御勘気を許し給え、今後悪事あらば、そのときはいかなる御勘当も受け候べし、また、吉事あらば必ずや告げまいらせんと言ったと見えたが、その狩衣の男のいた位置に一匹の狐おり、逃げた。その後狐は化けて出ることもなく、吉事には必ず予知したそうだ。<古今著聞集>

赤坂憲雄著<日本という不思議の国へ>

◎この本は幾人かの外国人が日本にやってきて、日本のことが好きだ嫌いだ、にかかわらず書かれた紀行文を載せている。「そんなことは 当然じゃないか」と日本人ならつまらない話、「ええ 外国人にとっては そういうモノか」と目からうろこの話、著者の先生も民俗学の立場から面白い話を解説されている。

◎あとがきに、何年か前に、大学の講義で、「異邦人のみた日本」といったテーマを選んだ。「逝きし世の面影」（この本は読んでいない 機会があればぜひ読みたい）をテキストにして、例によって、手探りに講義を重ねていった。予期せぬ応答が、通年講義の終わりに待ち受けていた。最前列に座り、ついに一度もノートをとらなかつた一人の聴講生が、突然挙手して、「何が言いたいのか わからない はっきり言って欲しい」と、明らかに苛立ちを含んだ、教室に響くような大きな声をあげたのだった。オレ：これを読んで、ニヤリとした、「答えを 結論を 期待したらあかん」「5W1Hは大事だ けれど」「詳しい話は ほっとけいの世界が たくさん存在しますぞ」紀行文の中には明治維新のころのものに関しては、遠野物語を読むようで面白い。舩倉島の海女の話、裸の話、恋愛と服を脱ぐ話これも助平心を感じさせ面白い。古代神道・密教の話、これも面白い。それとこの先生、いたく文章が上手いのは心地いい、他の民俗学の先生方の文章があまりに下手だから、かな。

◎アラン・ブース著 1946~1993<失われてゆく風景の中で>

◎オレ：この本は、太宰治の<津軽>という紀行文のような小説のような不思議な作品と先生は言われるが、機会があればぜひ読んでみたい。その太宰の津軽という作品の跡を追って、ブースは 40 歳代に、太宰に遅れること 40 年経って旅をした話だそうだ。先生の文章、ブースの文章、と交互に書かれていく読書感想文形式の、なかなか、お気に入りになりそうな文章である。

◎先生：ブースはまるで太宰と競いあおうというのか、大きな身体にひたすら酒を浴びるように流し続ける。そしてこの旅の 5 年後に癌で亡くなっている。尋常でないアルコールの飲み方と無縁であったとは思えない。アル中では自殺未遂の別名刺ではなかったか。ブースは繰り返し、太宰の自殺未遂について言及しているが、偶然ではあるまい。

◎先生：ブースはイギリスのロンドンの下町出身である。イギリスも日本もともに島国である。その島国について触れた一節にはそそられるものがある。

◎ブース：日本は確かに島国である。だから、その歴史と意識において、海がとてつもなく大きな役割を果たしている。もっとも文学においては、まったくと言っていいほど果たしていない。しかし島国にはふたつの側面がある。島を要塞としてみるか、牢獄としてみるかだ。生来外に目が向いて独立心旺盛な人間たちは、圧倒的に要塞としての視点から見てきた。そこで、周りを取り囲んでいる海を、強大な力の源と見るのだ。

◎先生：イギリスの場合には、「自然が自ら築いたこの砦—シェークスピア」として、つまり島を要塞とみなしながら、大洋という公道に身を投じて世界の半分を占める帝国を築きあげた。これとは全く対照的に、日本の場合には、歴史的に島は牢獄とみなされてきた。それはいわば、内側に陰気な眼を向ける習慣と、「閉じ込められ 囲われ 数限りない恩恵を奪われている」という思いとがひとつになった見方だ、とされる。海はまさしく、「冷酷で気まぐれで危険な障壁」であり、「獄舎の扉」であり、「公道」ではなかった。だから、海を渡ってゆくことは、「混沌をもてあそぶことであり、未知という恐るべき鬼とたわむれること」であった。

◎オレ：旅館の夜明け、「・・ううん・・むむ・・」意味のわからない男が何か唱える声。「あれはシジミ売りの声ですよ」雨の早朝、木造にいたのは、望んでも手に入らない月を求めて吠えている、ひどく孤独な男だった。

失われていく風景、それこそいやだいやだとブレーキをかけていても、どんどん姿を変えていく日本の風景。災害の多い国だ、災害が起こるたびに、昔の物、ちょっと古びてタガが緩んだものから順次潰れていく。災害は今に限ったことではない、昔の災害も、近代の災害も、躊躇なく遠慮なくなにやかやと破壊していった。その都度再建がされていく。日本的なもの、これが日本だと大きく叫べるもの、こんなものも時間が経ち、潰れてしまえば、次のものが大きく立ち上がる、これがまた時間とともに、日本的になってゆく。

◎湖西線北小松駅の改札を出た。そこにべたり大きな蝶、黒の中に緑やら青やらと蠱惑的なヤツ、触るとまだ生きています。クロアゲハより多少大きな気がするが、このあたりには立派な蝶がいるものだと感心。帰ってネットで調べたが、蝶の、昆虫の、門外漢には、どうして調べるのかさえ分からない。

◎車窓の田んぼは久しぶりに陽の明るさを受け緑が連なる、滋賀県の田園地帯はうまい米の産地だそうだ。湖西線が走る比良付近、山裾から湖まで5キロ10キロの間が段々に田んぼが連なる。比良に登り始めたころはほとんどが緑ばかりだったが、人が徐々に増え建物が連なりだした。都市近郊ベッドタウンとしてこれからも建物が増え続けそうだ。梅雨が明けきらない今日は、天候は晴れ、という実感はない、目的の比良山系の山々は雲にかすんで上部は見えない。記憶とは勝手なもので、雨の日が続くと、晴れの感覚を忘れてしまう、いつも湿っている、晴れと雨が繰り返すこんな日々が普通の日々だと思ってしまう、晴れて乾燥して雨など忘れてしまうという感覚を早く取り戻したい。

◎今日は、ほぼ一か月ぶりの山、6月下旬に大津ワングル道を登っている。7月に入って、雨の降る日は少なかったが、天気予報の晴れマークがなかなか表れず、後半に入ったら降る日が多くなり、山に登ろうというような天気の日ではなかった。

◎20分で滝のあるところ、登山口までやってきた。水分を5Lぐらい担いでいる、夏のための歩荷と思うがなかなか重い。青空が一部見られる、一日降らなければよし、と陽気に歩き出す。

◎まずはワンピッチ、涼峠にやってきた。虫よけスプレー、ハッカの香が心地いいがひりひりする、「おおお ヒリヒリ」今日の山は二つの目的がある、靴とレンズだ、大きな声では言えないが、買っちゃった。中西さんが、「空撮したい 千醒寺あたりを 最後に もう一回 9万円ぐらいかかる 大きな出費だが・・・」という、たぶん彼は決行するだろう。その9万円に比べれば少しは安いが・・・。

◎靴は、京都のロッジで買った。山田さんに付き合ってもらって、1時間ほどかけいくつかを履いては脱ぎの繰り返し、「これが いいかも」と言いながらもう一つを選んで買って帰った。帰ってすぐに試着、飯を食ってもう一回履いてみたが、なんだがきつい。思い切って店に電話、「変えてもらえるか」「履いてませんか」「外には出せないよ」「それじゃ どうぞ」開店時間を聞いて翌朝また京都に出かけた。靴は“シリオP I-431”というやつ、なかなか格好がいい、今までで一番かな。そういえば若いころから登山靴は何足買ったかな、革の物、ブーツ、ソコの張替えも4.5回は頼んだ覚えがある、けっこう散財をしているものだねえ。この京都の二日間、ちょうど祇園祭の真っ最中だったが、駅からロッジまでの往復をただけだった。

◎レンズは中西さん、「10~24mmの広角 中古でいいから」と尻を押され梅田まで買いに出かけた。今までの普通レンズと違い、見え方が違う、異様な世界が写る、「おもしろい」とほくそ笑む反面、おいそれとはいいい写真は撮れない。先日来、安威川河原に持って出て、何枚も写したがいい写真は撮れるものではない。青空が在ればと思うが、梅雨の真っ最中、毎日白っぽい空しか現れない、「よくないなあ」と嘆く日々であった。

◎ヤケ山までやって来たところで、相澤さんが体調が悪いという、「もうちょっと進んで 引っ返さかえすか」とあきらめた。「われわれ 釈迦付近まで 行きますので ここで休んで待ってて」ということで空荷で歩いた。「山はいい 気持ちがいい 歩けるのがいい」相変わらず青空が少しはあるが白っぽい空、前方の釈迦も、向こうの武奈やら蛇谷やらも上に雲が乗って、霞んで見えない。

◎靴、この登山靴はいい、もっと早く買うべきだったかなと、「あと 何年登れるか」「安物の靴でも 登れるぞ」などと気持ちが忸怩、躊躇、陰湿に下を向いて嘯いていたが、嬉々として喜んでいる。レンズ、これは難しい、「帰って パソコン画面を覗かないことには しかとわからない」とこれまた、忸怩、躊躇なく写したが、陰湿に下を向いて、「うまく写せなくても いいか」と嘯く。根っこが張り出した山肌を、根を掴みグイと登りながら、上を見て根っこ越しに空を向いて写してみた。帰って見るには、「多少いいかな」と照れ笑い。

◎またもや引き返し、「かってに ひとりで 帰って」と返すわけにはいかない。山はハイキングのような軽い簡単な山でも、危険がいっぱい、体調を整え、気を入れて登らないといけないぞと自戒。

赤坂憲雄著<性食考> この先生の本は二冊目、相変わらず文章は上手い、テーマが面白い。まず「はじめに」を読んで、「なるほど なるほど」と感じたので紹介します。このあとの本文では、面白い、気になる話がどんどん続くが、本文の話はまた後日。

◎「食べちゃいたいほど 可愛い」 そんなあられもない愛の言葉を囁いたことは、残念ながらと思う。しかし、例えば恋のクライマックスに、実際に口にするのではなくとも、そんな気持ちが掠めたくらいのことなら、あったかもしれない。食べることと、愛することや、交わることとの間には、どうやら不可思議な繋がりや関係が埋もれているらしい。先生、このテーマを秘かに追いかけてきて、本格的に取り組むことになるとは・・・と。

◎開高健著<食の王様>性欲・権力欲・食欲という三つの欲望をヒト、ことにオトコの根なるものと呼んでいる。この三つの欲望は厄介なことに、どれも独立したものとして純粋に表現されることはなく、「たがいにからみあい かさなりあい ときには反撥しあいながら」あるいは、「おたがいに菌糸のようにからみあい あたえあい 奪いあい」ながら、無数の変奏を生みださずにはいない。そして、「とことん追いつめたところでは おそらく薄明のなかの不定形としかいいようのない影の部分に根をおろしたものだろう」という。

◎それにしても、あの、「食べちゃいたいほど 可愛い」という囁きの声にじっくり耳を傾けてみたい。それはあるいは、人間という存在の深みに根をおろしている、いわば内なる野生の呼び声であるのかもしれない。あられもない愛の言葉に恥じらい、たじろぐ必要はない。食べること、愛すること、交わることとはきっと、ひそかに、かたく繋がれているのである。

◎芥川龍之介が後に妻になる女性に宛てた手紙：二人きりでいつまでも話していたい気がします。そうしてキスしてもいいでせういやならばよします。この頃ボクは文ちゃんがお菓子なら頭から食べてしまひたい位可愛い気がします。嘘じゃありません、文ちゃんがボクを愛してくれるよりか二倍も三倍も・・・

◎その10年後、芥川は文夫人と子どもらを遺して自死を遂げる。遺書には、「僕が二十九歳の時に秀夫人と罪を犯したこと」が告白され、「僕を愛しても 僕を苦しめなかった女神たち」に衷心の感謝が捧げられていた。

◎開高健・芥川の文章を読んで、「若いなあ 元気だなあ」とまず思ってしまった。これらの文章は彼らが二十歳代、三十歳代の言葉なのか、人生を夢中に生きていた時代なのか、眩しさと幼さがなまぜに感じられる。開高健がジジイの歳まで生きていたらどういふことをほざいていたのかなと調べてみた。1930年生まれ、58歳で没している。天王寺高校・大阪市立大学に学んでいる、サントリーに居た、芥川賞をとったということは別にして身近に感じるが、会いたくはない。オレが二十歳代の頃は、ベトナム従軍記者やら、外国の溪流で魚釣りをしているおっさんというイメージが強かった。ベトナム従軍記者の時には九死に一生の生還もあったらしい。

◎食べること、愛すること、交わること、これらが絡み合っただけで人生が進んでいくという考え方、これだけに決めることもあるまいとおもう。先生がこの三つを大事にして自論を展開されることに異論はないが、オレはもっと広々と、しかも論理的に生きることの大事を展開することはしたくない。若いころなら、食べること、愛すること、交わること、と聞けば目の色を変えて話したかもしれないが、決して興味のないことでも、不必要なことでもないが、ジジイになってほんわか浸って居たい世界がそういう話の外にあるのかな。平和ボケのこの日本、悪事を犯したり、強い主張をしたり、大金を稼がない限り生きていける。小銭を稼ぎ、TV解説を自分流に街の解説者になったり、趣味のスポーツや文化活動に時間を使ったり、「好々爺だ いいひとだ」と評判がいい近所の爺さん婆さんにはなりたくないね、ぼお～っとしていたいねえ。